

110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(13)

講題：東アジアから見た日本思想史

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 13 回は、京都大学名誉教授、中部大学フェロー辻本雅史教授による「東アジアから見た日本思想史」である。辻本教授はかつて台湾大学で 5 年間教鞭を執り、本講座で久しぶりに来台できることを楽しみにしていたが、現今のコロナ禍でやむを得ずオンライン講義となった。

辻本教授は冒頭で本講義のテーマを説明した。地球一体化が進む今日、従来の自国内部に閉じた歴史の語り、すなわち近代以降の一国史観を克服することの重要性である。また「語り」(ストーリー)は誰が誰に向けられるかによって変わり、「客観的」な歴史というものではなく、そうした認識の重要性についても語った。以上のことを、日本思想史が東アジアとの関わりの中で展開されたことを例に講義してくれた。

中国王朝と日本：相関的

最初に、中国の歴代王朝と日本の相関性が簡単に示された。先史時代、殷商時代から清朝時代まで、日本の各時代の為政者や知識人は多くの学問、文化を大陸から受容した。

古代：大陸文化受容

弥生時代に秦漢から鉄器や稲作が入った。漢字が伝えられたのは 5 世紀の南北朝時代で、その後儒教、仏教も導入された(朝鮮経由)。とりわけ仏教の影響は大きく、聖徳太子の思想や、飛鳥文化(法隆寺)、白鳳文化(薬師寺)、天平文化(東大寺、唐招提寺)に結実した。また密教も中国からもたらされた。

古代律令国家(7 世紀後半～)：唐制度導入

平仮名と片仮名は漢字から作られ、日本人の心を文字で表現できるようになった。同時に、貴族は教養として音道(中国語による音読)、儒教、仏教を学んだ。遣隋使・遣唐使を通じて日本は盛唐＝世界とつながった。また日本の「世界性」は宋銭による日宋貿易(宋経済圏)にも見ることができる。

中世・鎌倉時代(12 世紀末～14 世紀初)：宋・元

この時代の思想的中心は禅仏教で、渡来僧と留学僧が活躍した。建長寺や円覚寺、栄西と道元がその代表である。他方で、日本独自の特質を持つ鎌倉仏教が現われた。

南北朝一室町時代（14世紀前期～15世紀）：明帝国

元から明への交代期に日本でも南北朝時代＝社会変革期を迎えた。室町時代に日本は明の国際秩序＝冊封体制に入る。琉球貿易、倭寇もそうした国際秩序の現われである。渡来僧が多数来日し、五山文学、水墨画がもたらされた。

近世成立－安土桃山：明秩序崩壊期

明中心の国際秩序の崩壊期に、日本では信長・秀吉による統一政権が成立した。秀吉は朝鮮・明へ出兵し、明に代わる東アジアの制覇をもくろんだ。この時代は能楽、茶道、華道といった日本独自の文化を生み出した。

江戸期鎖国体制：明清交代

大陸は明から清へ代わり、日本では鎖国体制が確立される。鎖国は日本中心の国際秩序という意味で「日本型華夷秩序」の体制だった。しかし、鎖国体制下にあっても、長崎、対馬、薩摩、松前を通して外部世界とはつながっていた。

東アジアから見た近世思想史

近世以後は禅仏教に代わって儒教が知的資源となる。経書という東アジア共通のテキストが学ばれた。訓読（日本語として読む）、素読（四書五経を繰り返し読む。テキストの身体化）が実践された。

日本儒学

17世紀の日本人儒者は舶載漢籍で儒学を学び、テキストに訓点を付ける仕事を主とした。日本は東アジアを覆う宋・明代四書学の学術思想圏内にあった。その儒学に対抗するようにして山崎闇斎、貝原益軒、伊藤仁斎（古義学）、荻生徂徠（古文辞学）らが独自の儒学を生み出した。

国学思想

本居宣長は漢文的思考に対抗し、文字伝来以前の日本を探った。そして正しい日本語世界を取り戻すことによって、本来の日本を再構築しようとした。

幕末－近代

近代化とは西洋近代学知を受容することだが、それは漢訳を通してだった。そのため漢学的思考を共有する漢字文化圏にも西洋の学術は伝播された。このように日本は東アジアの歴史と関わり、学知と情報を共有していたのである。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 塚本善也・日文系副教授)